

佐那河内村所在 安喜古墳調査報告

考古班 (徳島考古学研究グループ)

中川 尚^{*1}

1. はじめに

考古班では佐那河内村における考古学的調査として、佐那河内村根郷に存在する安喜古墳の測量調査および、村内に分布する板碑の調査をおこなった。安喜古墳は、佐那河内村に存在する唯一の古墳で、佐那河内村大字中浦46番地 安喜哲夫宅入口北に所在する。過去、名東郡史¹⁾に根郷古墳との記載があり、その後、天羽1973²⁾、岡山・大塚1988³⁾に所在・規模等が報告されている。また、佐那河内村でも『佐那河内村の文化財』⁴⁾には根郷古墳として記載されているが、『佐那河内村史』⁵⁾には記載がない状況である。そこで、この根郷古墳の測量調査を計画したが、現地には「安喜古墳」の看板が立てられており、佐那河内村教育委員会も安喜古墳と認識されていることから、今回は「安喜古墳」の名称を使用する。過去、根郷古墳と書かれている古墳と同一の古墳であることを断っておく。

2. 佐那河内村安喜古墳の調査

1) 調査の経過

期 日 2001年7月25日(水)、28日(土)・29日(日)、
8月4日(土)・5日(日)、11日(土)、
9月14日(土)

調査員 小林勝美、柏野寿一、三宅良明、
下田順一、幸泉満夫、内 恵、
岡山真知子、中川 尚

所在地 名東郡佐那河内村大字中浦46番地

内 容 安喜古墳の墳丘測量および横穴式石室実測
調査協力 安喜哲夫、佐那河内村教育委員会

3. 調査成果

1) 立地

安喜古墳は名東郡佐那河内村根郷にある後期古墳である。剣山からつながる四国山地の東端、園瀬川沿いに開けた谷地形の南側斜面、標高58mの地点に立地している(図1)。前に園瀬川が流れ、谷が見渡せる尾根の先端部である。周囲には現在のところ安喜古墳と関連する遺跡等は確認されていない。また前期・中期のみならず後期古墳も確認されていない。

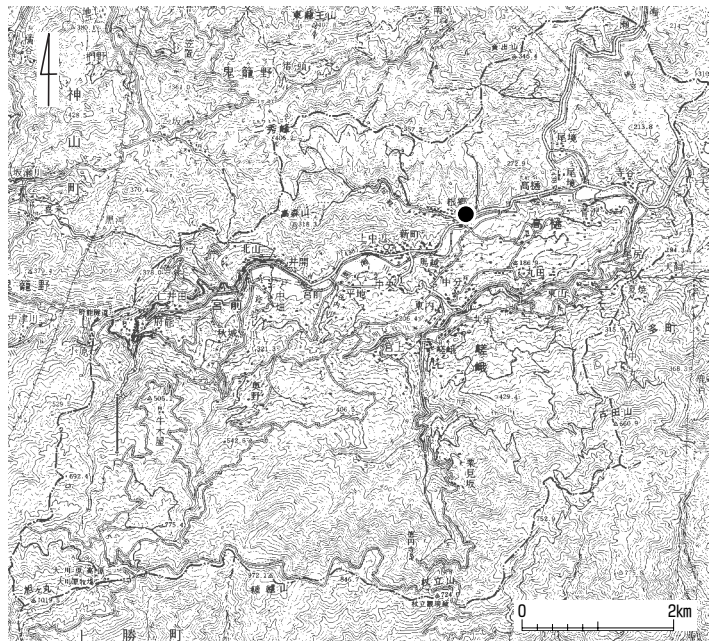


図1 安喜古墳の位置

(『徳島県名東郡佐那河内村全図』を基図とする)

*1 徳島県立池田高等学校祖谷分校教諭

園瀬川流域では本古墳より約5.5km下流の上八万町に樋口古墳、約9km下流の八万町に恵解山古墳群が位置するが、本古墳の石室構造とは異なっている。今後、本古墳に関連する集落遺跡等の確認が必要である。

2) 墳丘

墳丘は現状では楕円形となっており、墳丘頂部には祠が祭られている。周辺地形は果樹園などのため著しく改変されており、正確な墳形・規模は不明である。

測量調査の結果、墳丘は北から南に伸びる小丘陵の尾根先端部を切断してつくられている。墳丘の最高部には標高60.8mの等高線がまわり、現在残されている墳丘は標高59.8mの等高線が一周する。しかし、その一段下で58.6m～59.0m前後の等高線上では、明らかに尾根を切断しており、今回はこれを墳

丘裾部と捉えた（図2破線）。

以上から、安喜古墳は径10m・高さ2mの円墳と現状では復原できた。ただし、墳丘上部の盛り土はかなり流れており、本来はもう少し盛り土があったものとみられる。

3) 石室

安喜古墳の内部主体は両袖式の横穴式石室である。古くから開口していたとみられ、石室の床面には五輪塔の石材や板碑が散乱していた。石室入口には木製の扉が設けられ、さらに奥壁中央部には壁面を積み替えてつくられたとみられる、祭壇状の施設も設置されている。壁面の石材も抜き取られ、その後を漆喰で塗り固めるなど、大規模な改変のあとが見られる。このため、古墳の横穴式石室ではないと判断して古墳の中に加えられていない場合が多かった⁶⁾。が、実測調査を行った結果、かなり改変が行

われているものの床面近くは原状を残していると判断した。本来の床面は数cm下に残されていると考えられる。また、壁面も表面の石材は抜き取られているものの控え積みなどが残った状態で漆喰で固めたのではないかと考えた。以上から、この石室を横穴式石室と捉え、以下に成果をまとめた。

横穴式石室は、墳丘ほぼ中央部で磁北ではあるが真南に開口している。石室の全長は4.40m、玄室長2.84m⁷⁾、奥壁幅1.53m、奥壁高1.80m、玄室最高高2.28m、玄室最大幅1.70m、羨道長1.56m、羨道先端幅1.05m、羨道高1.48mとなっている（図3）。

平面形は玄室の奥壁隅が隅丸になっている点が大きな特徴である。これは徳島県内では麻植郡を中心に分布している忌部山型石室⁸⁾に見られる特徴である。しかし、玄室最大幅と玄室最小幅の差が17cmと小さく忌部山型石室の平面形のもう一つの特徴である胴張りがみられない。また、玄門部では通常、側壁が矩形もしくは弧を描いて狭まってくる例が多く見られるが、本石室では羨道の先端に向か

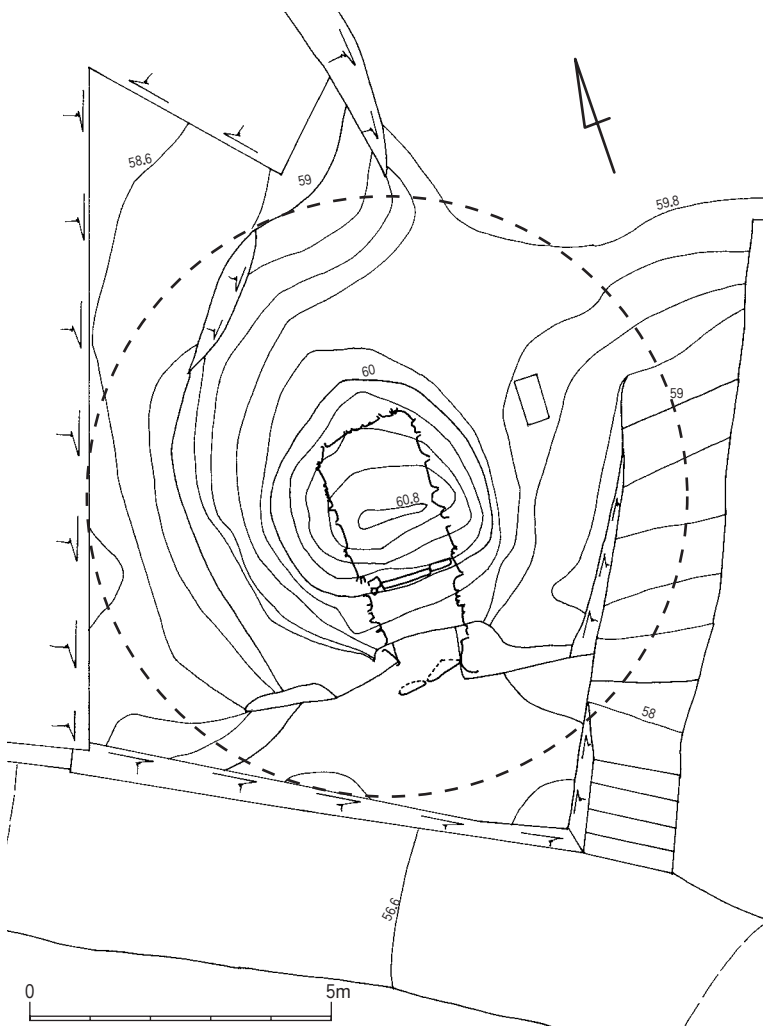


図2 墳丘実測図

(等高線間隔は25cm。数値は標高を示す単位m。---- は墳丘復原推定ライン)

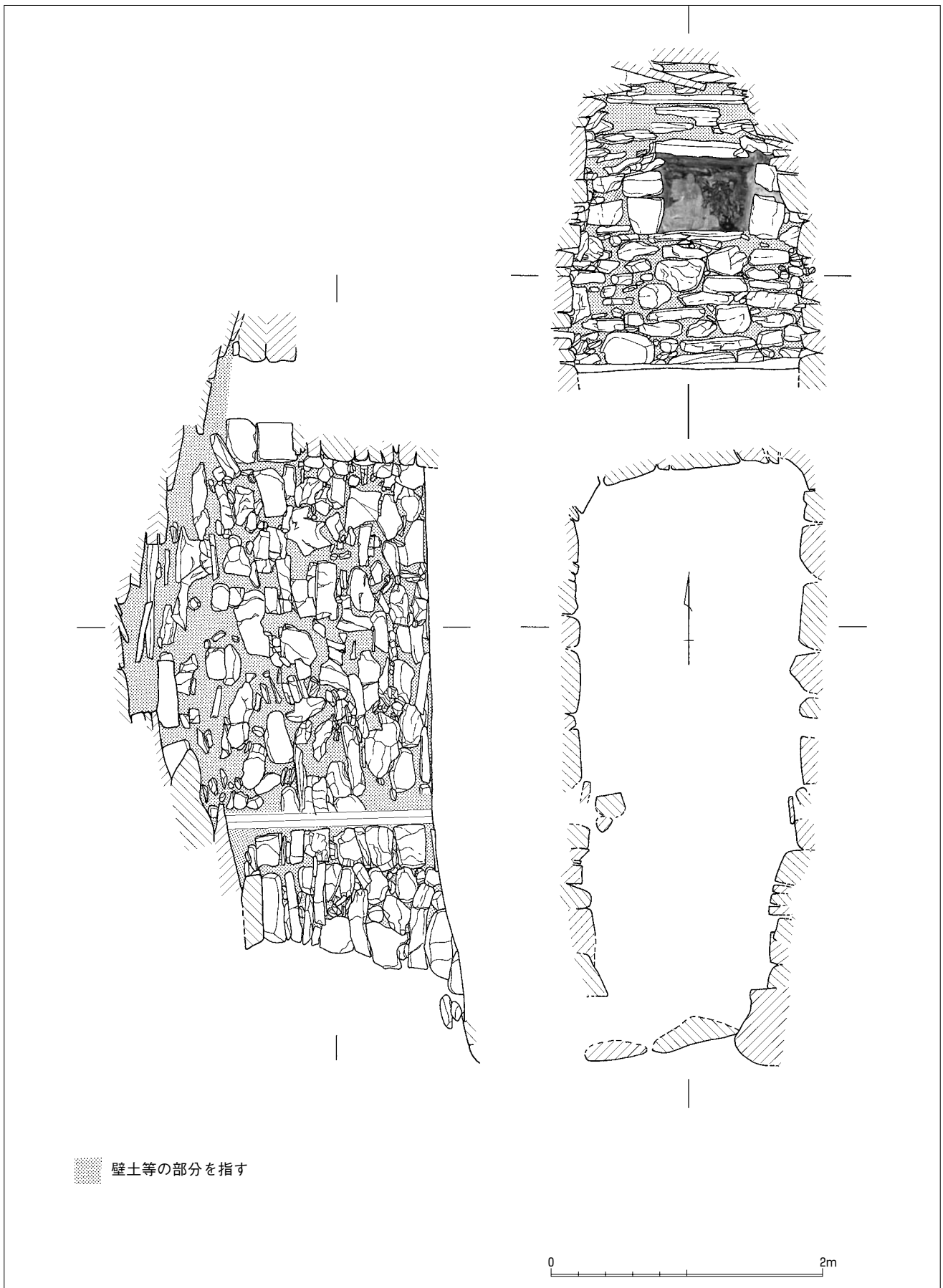


図3 安喜古墳横穴式石室実測図

ってゆるやかに狭まってはいくが、明確な玄門は確認できなかった。

天井は11枚の天井石がかけられている。少しずつ持ち送られ奥壁から5枚、玄門部からも4枚が架けられ、中央の2枚が最高部となるよう架けられている。中央部の一枚は土圧によるものか割れている。このような持ち送りの天井構造は徳島県内では県西部、美馬郡を中心に分布する段ノ塚穴型石室⁹⁾や、先述の忌部山型石室にみられるものである。

玄門は先述の平面形でも述べたように、構造からは明確に確認することができなかった。無袖式である可能性も考えられたが、先述したとおり本石室は大規模な改変がくわえられており、とりわけ石室の入り口部分での改変が著しく、正確な判断はできなかった。

4) 安喜古墳の評価

以上の調査の成果より、本石室は両袖式の横穴式石室で、忌部山型石室と密接に関連した石室であることがわかった。本石室の築造時期であるが、古くから開口していたこともあり、遺物はすでになく正確には不明であるが、6世紀後半の築造を想定する。ただし、石室の構造が無袖式である場合はもう少し時期が新しくなる可能性がある。

4. 考察－忌部山型石室に関する小考－

ここでは安喜古墳の属する忌部山型石室について若干の考察を加える。

1) 忌部山型石室の概要

忌部山型石室については、天羽利夫氏によって次のように概念規定されている¹⁰⁾。

- ア. 玄室の平面形では、玄室の奥壁側の隅が矩形ではなく丸くなっている。また玄室中央から玄門にかけてカーブを描いてすぼまっていく形となっている。胴張りも見られる。
- イ. 段ノ塚穴型石室と同様の天井構造となっているが、全体としては段ノ塚穴型石室よりは平坦である。

一方、板野郡地域では平面形でみる限りにおいては、今述べたような特徴をもつ忌部山型石室に類似する石室が展開している。ただし、肝心の天井構造が不明なため、忌部山型石室とは断定できないが、

密接な関係をもつ石室であると考えられ、今回は一括して扱うこととする。忌部山型石室の特徴の一つとして尾根筋に2～5基程度群集し、最高点では標高250mといった高所に立地することが指摘されている¹¹⁾。今回調査した安喜古墳は、忌部山型石室のなかでは比較的低位に立地しているといえる。

2) 忌部山型石室の編年素案

次に忌部山型石室の編年素案を提示したい。麻植郡内の忌部山型石室の変遷の方向性については、菅原康夫氏によって次のように考えられている¹²⁾。

- ア. 段ノ塚穴型石室と同じような階段状に天井石が持ち送られているものから、より平天井に近いものへと変化していく。
- イ. 平面形の玄門部の幅が狭くなり、玄室が細長くなる。

一方、板野郡内に展開する石室に関しては、藤川智之氏によって編年がおこなわれている¹³⁾。変化の方向としては、平面形にみられる胴張りが直線に、袖部も退化して無袖式になっていくとしている。

これらの成果をもとに、平面形を中心とした各属性の形式学的変化をとらえることによって、編年の素案を提示したい。なお、本稿において扱うのは、実測図があり、各属性の比較が容易な10石室とする(表1)。

本稿で提示する編年案は、平面形の属性である玄室比・袖比・胴張度をもとに想定した。

この中でもっとも変化の方向性を示しているのは、玄室比である。玄室比150～190を第1期、220～250を第2期、290～360を第3期とした。基本的に石室長と石室幅の差が少ない150から細長い平面形の360へと長胴化の方向を想定した。

袖比では、イレギュラーもみられるが、基本的に袖幅のある2.6:1から無袖式の1.2:1の方向を想定した。

胴張度もイレギュラーがみられるが、基本的に胴張りの強い170から胴張りのみられない100への変化の方向性を想定した。

以上の3点の属性の変化を総合したのが表2である。玄室比で想定した方向性で他の袖比・胴張り度も無理なく変化しているといえる。そこで、玄室比の変化をもとに次の3期の編年を設定した。

表1 忌部山型主要石室一覧

(単位: cm)

| 古墳名 | 玄室長 | 玄室幅 | 玄室高 | 玄門幅 | 羨道長 | 羨道幅 | 地域 |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 忌部山1号墳 | 275 | 180 | - | 70 | 270 | 105 | 麻植 |
| 忌部山2号墳 | 338 | 192 | 199 | 74 | 280 | 110 | 麻植 |
| 忌部山5号墳 | 278 | 150 | - | 60 | 285 | 90 | 麻植 |
| 境谷古墳 | 320 | 180 | 200 | - | 100 | 60 | 麻植 |
| 金勝寺古墳 | 350 | 160 | 150 | 57 | 105 | 80 | 麻植 |
| 山崎1号墳 | 320 | 130 | - | 80 | 350 | 120 | 板野 |
| 柿谷1号墳 | 414 | 115 | - | 93 | 373 | 114 | 板野 |
| 柿谷3号墳 | 330 | 115 | - | 83 | 330 | 128 | 板野 |
| 柿谷4号墳 | 388 | 118 | - | 92 | - | 94 | 板野 |
| 柿谷7号墳 | 350 | 180 | - | 108 | - | 127 | 板野 |

表2 忌部山型石室編年案¹⁴⁾

| 属性 | 第1期 | | | | | 第2期 | | 第3期 | | |
|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 玄室比 | 150 | 180 | 190 | 180 | 190 | 220 | 250 | 330 | 290 |
| 袖比 | 2.6:1 | 2.6:1 | 2.5:1 | - | 1.6:1 | 2.8:1 | 1.6:1 | 1.3:1 | 1.4:1 | 1.2:1 |
| 胴張度 | - | 130 | 160 | 170 | 130 | 170 | 160 | 120 | 130 | 100 |
| 古墳名 | 忌部1 | 忌部2 | 忌部5 | 境谷 | 柿谷7 | 金勝寺 | 山崎1 | 柿谷4 | 柿谷3 | 柿谷1 |

◇第1期 忌部山型石室導入期

この時期の石室は胴張りが顕著である。最古段階に位置づけられる忌部山1号墳の玄門部において柱状立石をもつことから、忌部山型石室の成立は段ノ塚穴型石室において柱状立石が導入される時期以降である。実年代は、忌部山古墳群の出土遺物よりTK43¹⁵⁾、6世紀後半の時期を想定しておく。該当する石室は、忌部山1・2・5号墳、境谷古墳、柿谷7号墳である。

◇第2期 忌部山型石室展開期

この時期になると、石室構造では、玄室比が220から250と長胴化が始まる。ただし、胴張りは顕著である。実年代は、山崎1号墳の出土遺物より6世紀後半から末の時期を想定しておく。該当する石室は、金勝寺古墳、山崎1号墳である。

◇第3期 忌部山型石室終焉期

この時期になると、板野郡でも盛んに構築されるようになる。石室構造では、長胴化がより一層進み、玄室比が290から360と非常に細長くなる。さらには、忌部山型石室の大きな特徴であった隅丸も解消され、平面形が方形の無袖式となる。実年代は、柿谷古墳群の出土遺物より、TK209・TK217¹⁶⁾、7世紀初頭から前半の時期を想定しておく。該当する石室は、柿谷4・3・1号墳である。

次に、この3期の編年を出土遺物で検討する。第

1期の忌部山1・2・5号墳、柿谷7号墳ではTK43段階の須恵器が出土している。第2期の山崎1号墳でもTK43段階の須恵器が出土している。よって、第1期と第2期はきわめて短期間に築造されたとみられる。第3期の柿谷4号墳ではTK209段階の須恵器、柿谷3・1号墳ではTK217段階の須恵器が出土している。これより編年は矛盾をきたさず、想定した方向で忌部山型石室の変化を捉えることが可能である。

以上、忌部山型石室の編年素案を提示した。ただし、各石室の遺存状態がよくなく、比較対照した個体数が少なく、取り上げた属性も平面形に限定されるなど、課題は残されているが、あくまでも大きな編年の方向性を示したものであることを断っておく。また、今回調査した安喜古墳は前述もしたが玄室の改変が著しくこの編年には加えなかったが、玄室比は167であり、他の属性は該当しないが、第1期に該当する可能性が高いと考えられる。

5. おわりに

今回調査した安喜古墳は、石室構造から忌部山型石室の特徴をもつことが明らかとなった。そこで、忌部山型石室の編年案も提示するなど小考を加えた。

最後に、調査にご協力いただいた安喜哲夫家の皆様方に厚く感謝申し上げたい。

注・文献

- 1) 飯田義資 (1960) : 『名東郡史』名東郡自治協会。
- 2) 天羽利夫 (1973) : 「徳島県下における横穴式石室の一様相」『徳島県博物館紀要』第4集。
- 3) 岡山真知子・大塚一志 (1988) : 「海原古墳調査報告」『徳島県博物館紀要』第19集。
- 4) 佐那河内村文化財保護審議委員会 (1978) : 『佐那河内村の文化財』。
- 5) 佐那河内村史編集委員会 (1967) : 『佐那河内村史』。
- 6) 例えば、文化庁文化財保護部が編集した『全国遺跡地図36 徳島県』(1970年)には記載がない。
- 7) 明確な玄門は認められないが、天井部で玄室から一段下がり、平面プランで僅かではあるが玄室より幅がすぼまる石を境界として、玄室と羨道の区切りとした。左端部で2.75m、中央部で2.84m、右端部で2.85mを測るが、中央部の測定値を玄室長とした。
- 8) 天羽利夫 (1977) : 「徳島県下における横穴式石室の一様相-その2-」『徳島県博物館紀要』第8集。
天羽利夫他 (1983) : 『忌部山古墳群』徳島県博物館。
- 9) 天羽利夫 (1977) : 「徳島県下における横穴式石室の一様相-その2-」(前掲書)。
- 10) 注8)に同じ。
- 11) 注8)に同じ。
- 12) 菅原康夫 (1988) : 『日本の古代遺跡37徳島』保育社。
- 13) 藤川智之 (1992) : 「須恵器からみた徳島県後期古墳の側面」『真朱』創刊号、(財)徳島県埋蔵文化財センター。
- 14) 表中に使用した分類基準は以下のとおりである。
玄室比：玄室長／玄室最大幅×100
袖比：玄室最大幅：玄門幅
胴張度：玄室最大幅／玄室最小幅×100
- 15) 田辺昭三 (1986) : 「須恵器の変遷」『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ。
- 16) 注15)に同じ。